平成21年度

宮畑遺跡公開講座

「じょーもぴあ宮畑の掘立柱建物」
宮畑縄文人の掘立柱建物は？

日時 平成22年2月20日(土)
午後1時30分～4時

会場 東部勤労者研修センター

■コーディネーター

岡村　道雄（宮畑遺跡整備指導委員会副委員長）

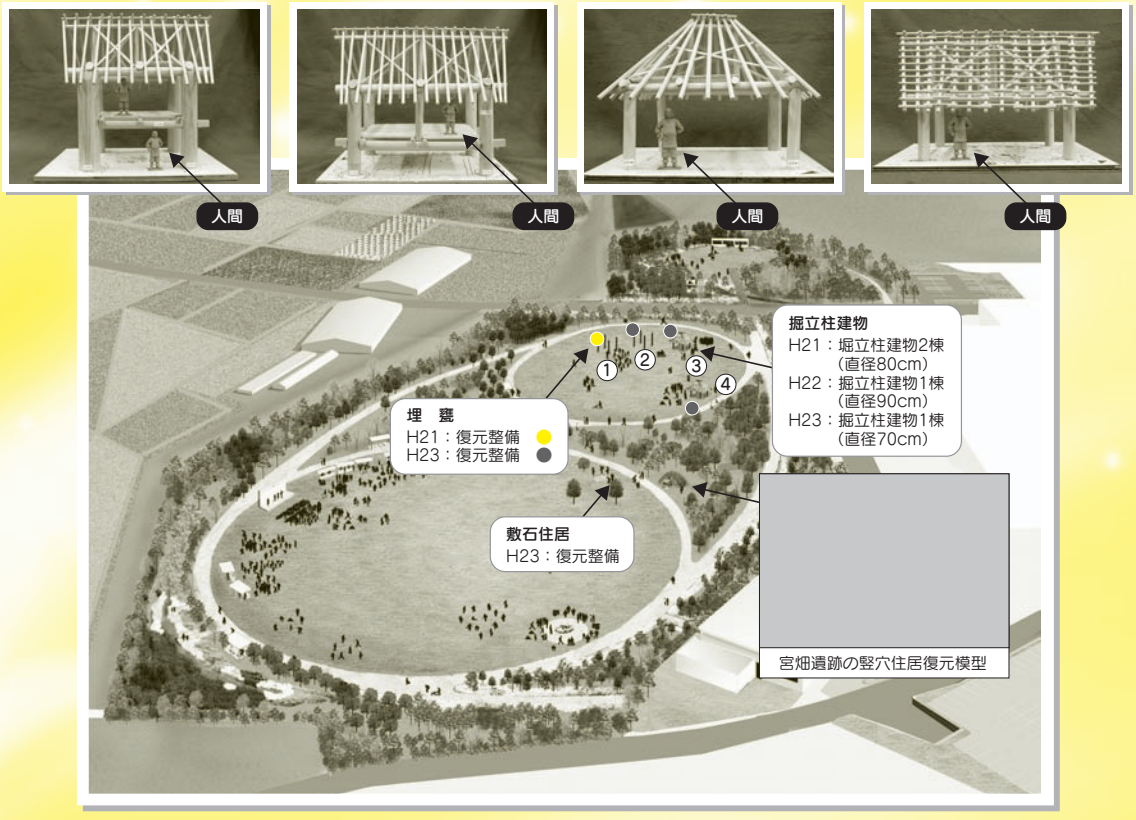
■パネラー

高島　成侑（元八戸工業大学教授）
斎藤　義弘（福島市教育委員会文化課）
新井　達哉（福島市教育委員会文化課）

■パネルディスカッション

○第一部「三内丸山遺跡での掘立柱立建物発見の前と後」
○第二部「じょーもぴあ宮畑の掘立柱建物復元」

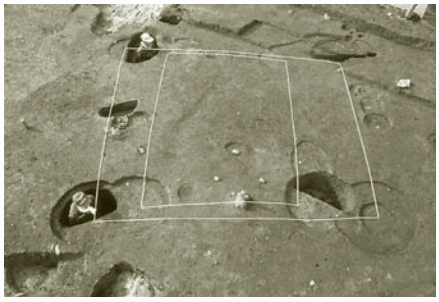
■現地見学



1. 宮畑遺跡の掘立柱建物

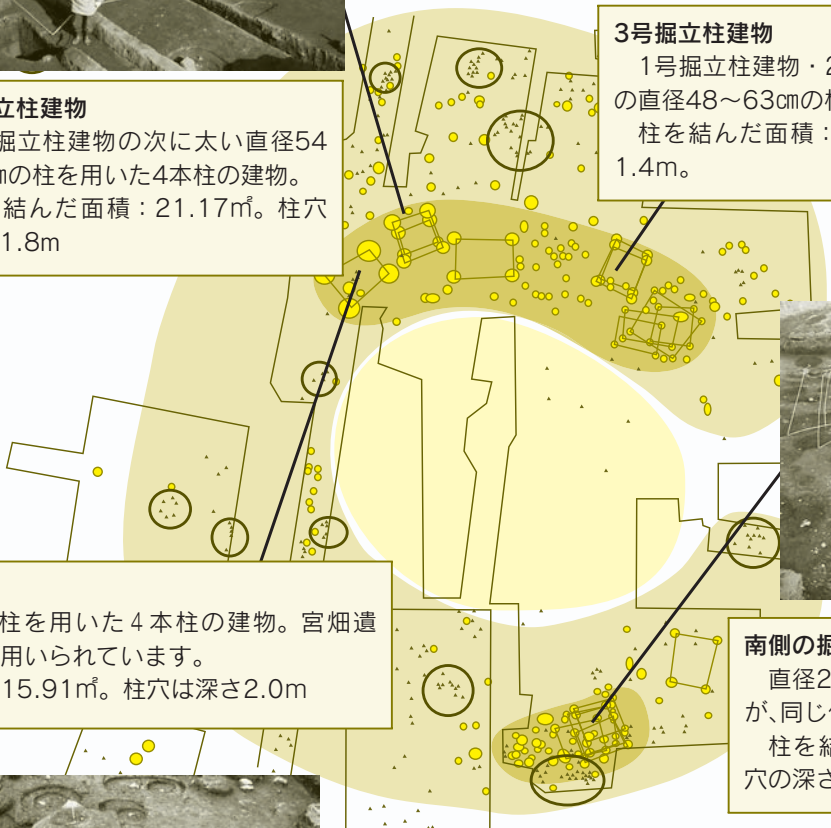
縄文時代晩期（3,000～2,500年前）に宮畑の地には、4本の柱を用いた建物が広場を囲んで建っていました。掘立柱建物は、直径60以上の柱を用いられた一群（A群）と直径30㎝前後の柱を用いた一群（B群）があり、A群は北西側に3棟だけが確認されています。宮畑遺跡では、縄文時代晩期の他に、縄文時代中期（約4,500～4,000年前）と縄文時代後期（約4,000～3,000年前）の集落が存在していましたが、じょーもぴあ宮畑の整備の屋外展示では、縄文時代晩期の掘立柱建物の様子と掘立柱建物と密接な関係が認められる埋甕を中心に復元する計画です。

(1)晩期の遺構配置



2号掘立柱建物
1号掘立柱建物の次に太い直径54～72㎝の柱を用いた4本柱の建物。
柱を結んだ面積：21.17㎡。柱穴は深さ1.8m

3号掘立柱建物
1号掘立柱建物・2号掘立柱建物に次ぐ太さの直径48～63㎝の柱が用いられています。
柱を結んだ面積：15.54㎡。柱穴の深さ：1.4m。



1号掘立柱建物
直径68～90㎝の柱を用いた４本柱の建物。宮畑遺跡では最も太い柱が用いられています。
柱を結んだ面積：15.91㎡。柱穴は深さ2.0m

南側の掘立柱建物群
直径20～30㎝の柱を用いた掘立柱建物が、同じ位置で5棟建て替えられています。
柱を結んだ面積：8.71～20.06㎡。柱穴の深さ1.1m前後。

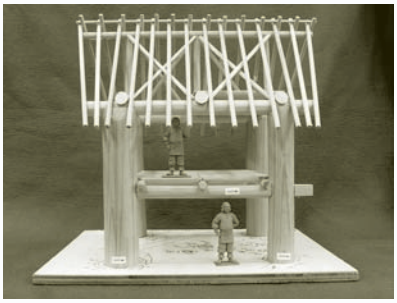
掘立柱建物群に隣接する埋甕群
黄色の塗箸を立てたところに甕が埋まっています。北に5回以上建替えられている掘立柱建物群があり、掘立柱建物の密度の濃さに比例するように、埋甕が隣接あるいは古い埋甕を壊して狭い範囲に構築されています。

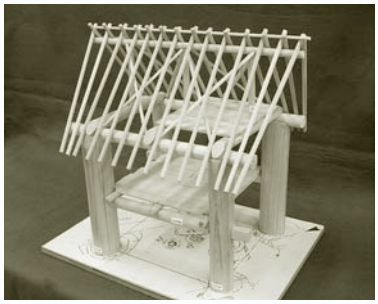
2基の埋甕が埋められている様子
日常に用いていた土器を幼児埋葬に転用されて地面に埋められています。

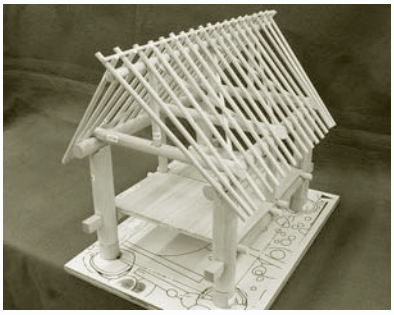
⑵掘立柱建物復元案

じょーもぴあ宮畑の屋外展示では、縄文時代晩期の掘立柱建物4棟を復元します。掘立柱建物は、幼児埋葬施設である埋甕との密接な関係がある、祭祀に用いられた建物として復元案を作成しました。

復元案作成にあたっては、8頁に紹介している桜町遺跡（富山県小矢部市）で発見された縄文時代の建築部材で確認された建築技術を参考に、石斧を用いた加工技術による建物を検討しました。

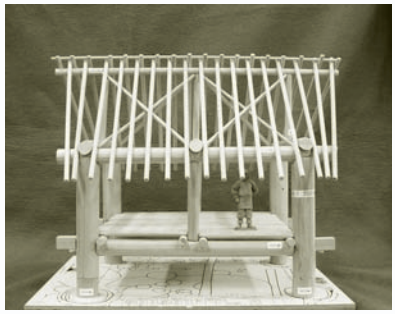






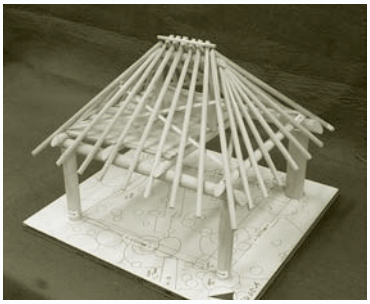
1号掘立柱建物

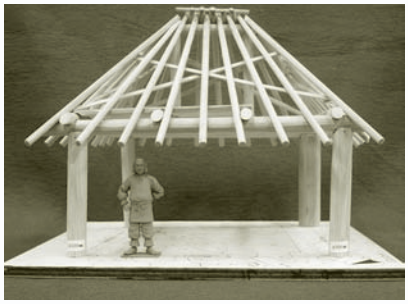
地上高4mの直径90㎝の柱で切妻の屋根を支えています。全体の地上高は7mで、太い柱のほぞ穴に桁材、梁材を差込み、桁材と梁材に割材を横架して床を作っています。4本柱の頂部を利用して屋根裏部屋を設けています。常時居住していたのでなく、祭祀に用いた建物のため、壁は設けていません。



2号掘立柱建物

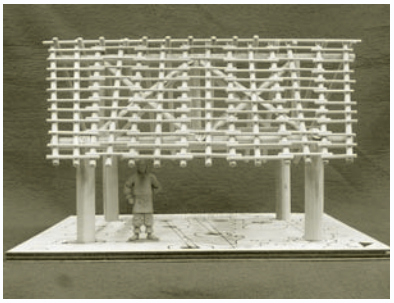
1号掘立柱建物を同じ構造で、柱穴の深さが1号掘立柱建物よりやや浅いので、4本柱の地上高は　mとなっています。全体の地上高は　mです。

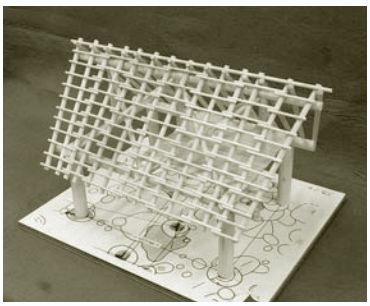




5号掘立柱建物

同じ太さの掘立柱建物の柱穴の深さが1m前後のため、柱の地上高は2mとしました。4本柱の頂部に桁材と梁材を横架して寄棟の屋根をのせています。1・2号掘立柱建物と異なり、土間が祭祀空間で、4本柱の上部は倉庫的な機能を持った空間としています。





10号掘立柱建物

5号掘立柱建物と同じく柱の地上高は2mですが、柱間が広いため、切妻の屋根としています。5号掘立柱建物と同じく、土間空間と倉庫的な空間を作っています。

謎その1

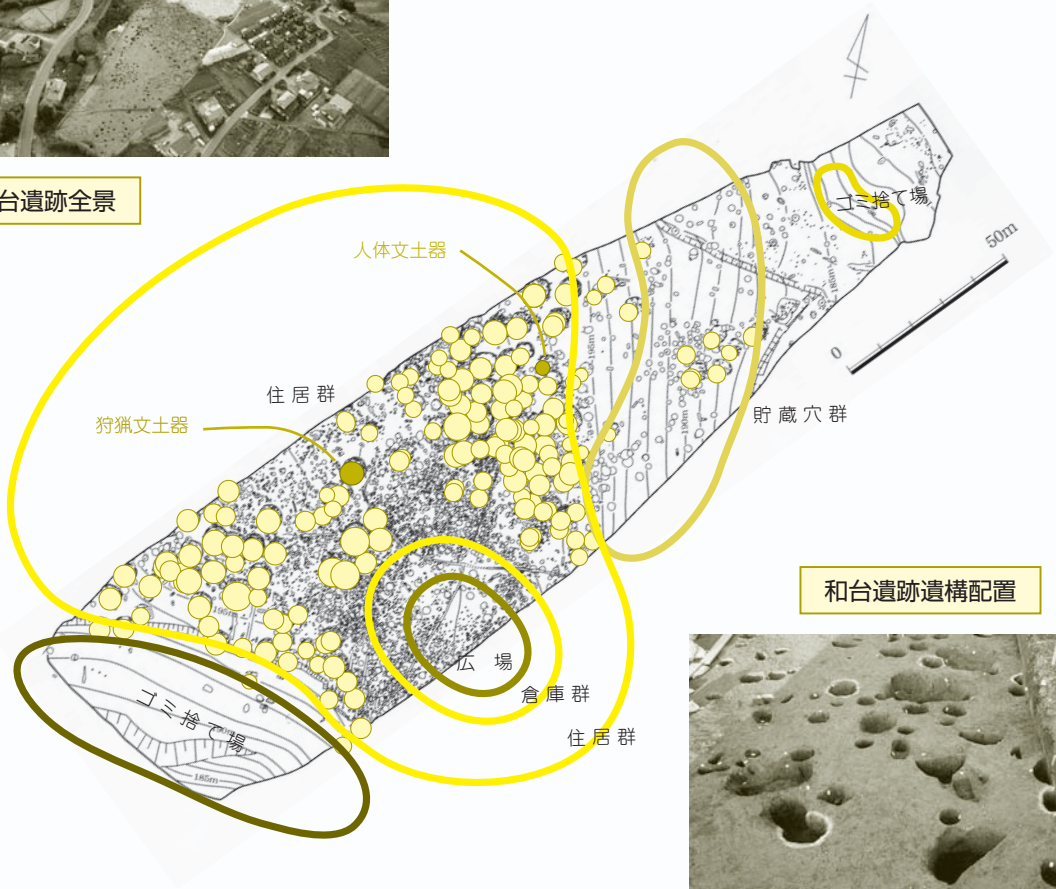
「90㎝の柱を使った建物」のまとめ

○太い柱は一番阿武隈川よりのところにあり、突出した太さであるので、祈りの場ということがある。
○位置と太さが重要で、他の建物とは突出して高いものであったと思う。
○阿武隈川がすぐそばを流れていたということから、当時は舟で物資を運んでいたので、物流の港的なものがあった可能性もある。こちらから見る場所でなく、向こうから見える場所に建てたのではないか。
◎当時、**宮畑縄文むらの象徴的な建物**であったことはまちがいない。

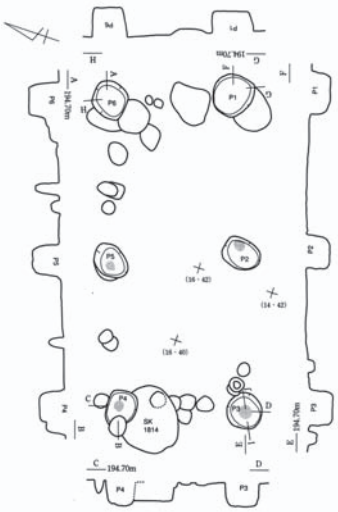
2.和台遺跡の掘立柱建物

和台遺跡全景

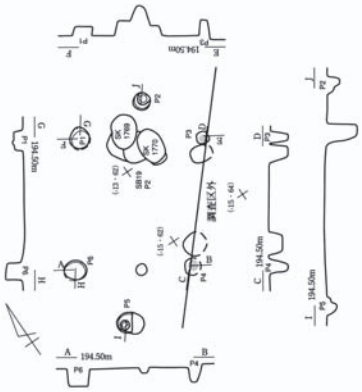
中央広場を囲む直径60ｍの範囲から24棟の掘立柱建物跡が発見されており、その範囲から柱穴と思われる同様のピットが数百基見つかっています。掘立柱建物群の外側には230棟を越す複式炉を持つ竪穴住居跡が分布しており、住居と同時期に掘立柱建物が存在していたと考えられます。



和台遺跡遺構配置



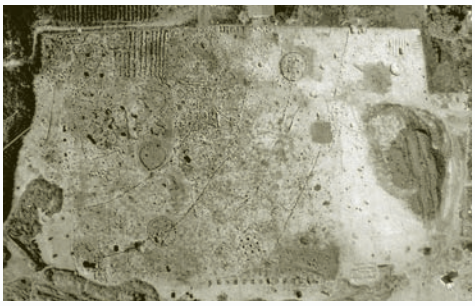
6号掘立柱建物
6本柱の建物跡で、土層や柱穴の底部には柱を立てた痕跡が認められています。
柱穴の深さは：46～77㎝。柱を結んだ面積：27.06㎡。



20号掘立柱建物
6本柱の建物跡ですが、柱穴の配置は亀甲形となっています。4本が主柱となり、長軸側の2本の柱は屋根を支えるための束柱の役割を果たしたものと考えられます。
柱穴の深さは：48～70㎝。柱を結んだ面積：19.7㎡。

南諏訪原遺跡

松川小学校建設に伴う発掘調査で縄文時代晩期の集落が確認されています。集落内には掘立柱建物と竪穴住居が存在し、竪穴住居が居住施設、掘立柱建物は居住以外の機能が考えられています。南諏訪原遺跡では、宮畑遺跡の縄文時代晩期の掘立柱建物群では認められない柵列で囲まれています。

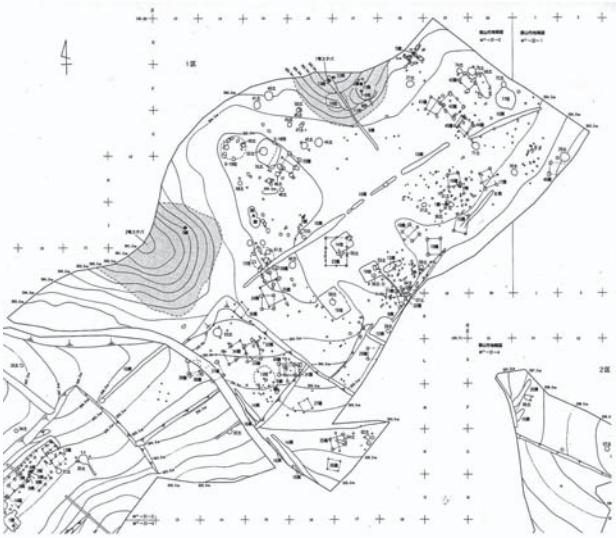


南諏訪原遺跡の空撮写真
中央に柵列があり、写真右側に竪穴住居、左側に掘立柱建物が存在する。掘立柱建物は環状に配される柵列の中央部に存在し、その周囲に竪穴住居が配されていることがわかります。

縄文時代晩期の竪穴住居
直径5m前後の円形に地面をほり、その内側に4本柱を配して桁・梁を配して屋根をかけていました。柱の直径は15～20㎝で掘立柱建物よりは細いものが用いられています。

縄文時代晩期の掘立柱建物
掘立柱建物は、宮畑遺跡と同じく4本柱のものと、亀甲形に配される6本柱のものがあります。柱の直径は30～50㎝で、柱穴の深さは最も深いもので1.1mです。

南諏訪原遺跡遺構配置



下羽広遺跡（郡山市）
広場を囲むように縄文時代晩期の掘立柱建物31棟が確認されています。宮畑遺跡で確認された直径60㎝を超える太い柱を使った建物はなく、埋甕との密接な関係も確認されません。掘立柱建物で構成されるものの、宮畑遺跡の掘立柱建物と同じ機能であったのではないと考えられます。報告では、貯蔵穴が存在しないことから倉庫の機能が指摘されています。

3. 各地の掘立柱建物

三内丸山遺跡

三内丸山遺跡は、今から約5500年前～4000年前の縄文時代の集落跡で、長期間にわたって定住生活が営まれていました。

平成4年からの発掘調査で、竪穴住居跡、大型竪穴住居跡、大人の墓、子どもの墓、盛土、掘立柱建物跡、大型掘立柱建物跡、貯蔵穴、粘土採掘坑、捨て場、道路跡などが見つかり、集落全体の様子や当時の自然環境などが具体的にわかりました

掘立柱建物

北盛土と南盛土の境目付近を中心に、掘立柱建物も作られました。地面に柱穴を掘るものの、竪穴を掘込んだ形跡や炉が無いため、高床の建物と推測されています。倉庫、葬制に関連する施設などの用途が考えられます。掘立柱建物の中で最も巨大なものは、遺跡の北西端で見つかった大型掘立柱建物です。

用途としては、神殿、物見やぐら、モニュメントなどの説が唱えられています。クリの木による6本の柱を長方形に配置した建物で、確認された柱の太さはそれぞれ約1mもあります。柱の間隔（中心から中心）は4.2mです。その他の建物の柱間隔も検討した結果、35㎝か70㎝が長さの単位になっていたのではないかと考えられています。

大型掘立柱建物

地面に穴を掘り、柱を建てて造った建物跡です。柱穴は直径約2メートル、深さ約2メートル、間隔が4.2メートル、中に直径約1メートルのクリの木柱が入っていました。地下水が豊富なことと木柱の周囲と底を焦がしていたため、腐らないで残っていました。6本柱で長方形の大型高床建物と考えられます。

威圧感ある大型掘立柱建物

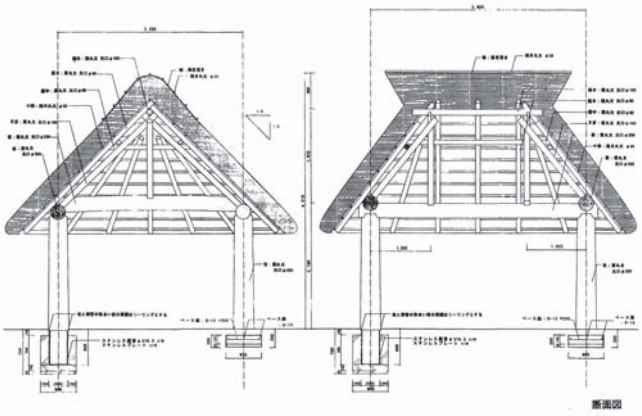
道の行く手には掘立柱建物が両側に並び、手前の北側（右側）には、子どもの墓地があった。ここには、死産した子や乳幼児の遺体が入れられた多数の土器（幼児甕棺、埋設土器とも呼ぶ）が埋められている。その左には、高さ2メートルもある大きな盛土があり、**その向こうには、もっと大型の掘立柱建物がそびえている。アカメのムラにはない、威圧感のある建物**であった。

ムラの中の様子は、アカメのムラの様子とはかなり違っている。いったいどんなふうになっているのか、何となく不安になった。大型の掘立柱建物の周辺に、明日からの祭りのためだろうか、忙しそうに行き交う人びとの姿がチラホラみえたときには、内心、ほっとした。

大湯環状列石

縄文時代後期の墓地と考えられる環状に配された列石の周囲に建物群が存在し、その外側に居住施設の竪穴住居が確認されています。建物群は墓に関する祭祀施設の可能性が考えられています。

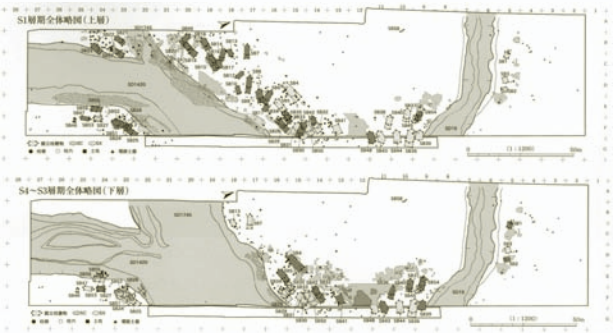
大湯環状列石遺構配置



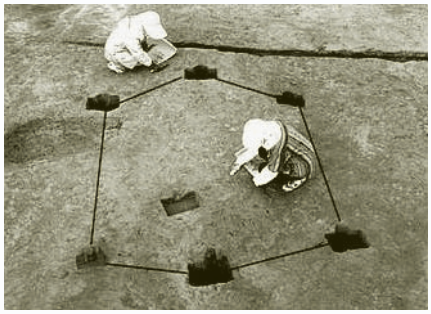
第25図　第608号建物復元図

史跡整備状況
縄文時代の環状列石の実物石を露出展示し、その周囲に掘立柱建物が復元されています。

青田遺跡



青田遺跡（新潟県新発田市）
幅25～51mの河川両岸に58棟の掘立柱建物が発見されています。花粉分析によるクリ林の減少とともにむらが衰退していることから、クリ林がむらの近くにあったことと考えられています。堅果類を主体とする植物利用とコイ科などの漁撈を組み合わせた生業を営み、掘立柱建物は通年居住のための住居と考えられています。



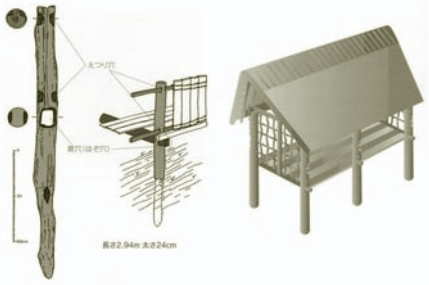
青田遺跡の掘立柱建物は面積が8㎡未満の小形、8～15㎡の中形、15㎡以上の大形に分けられます。大形の建物ではクリが用いられることが多く、小形になるほどコナラ節やクヌギ節の木材が用いられています。

桜町遺跡

谷の出口付近の湿地部から縄文時代中期の終わり頃の建築部材が多量に発見されています。木の実のあく抜きや虫だしの場と考えられる木組を伴う水場も発見され、木組には建築部材が転用されています。現在までのところ、縄文時代の建築部材の発見例は桜町遺跡が最も多く、縄文時代の建築技術を知る上で大変貴重な資料となっています。

復元された縄文時代の掘立柱建物

建築部材の中には柱と考えられるものがあり、細くなっている柱の1/3が地上に埋められていた部分と考えられています。この例を参考にすると、宮畑遺跡の直径90㎝の柱を埋めた穴の深さは2mであることから、地上に出ていた柱は4mの高さであったことになります。復元にあたっては、桜町遺跡の例をもとに柱の長さを決定しました。



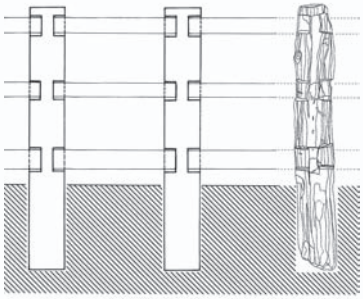
高床建物と柱材の使われ方

柱材の出土状況

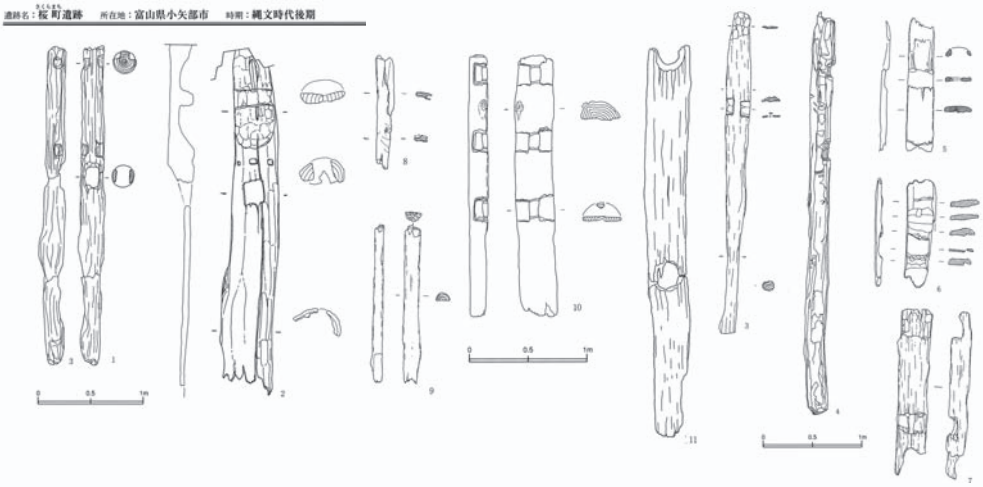
桜町遺跡遠景写真

柱材の出土状況

壁材か



設置想像図　（S＝1／20）



桜町遺跡で出土した柱材など